



(絵：野口宣友)

## 南部町の民話

# 春日の ふたり狐



昔むかし「坂根」という村に、春日山（かすがさん）と呼ばれるちっちゃな山がありました。

ある日、すっかり暗くなった頃、お百姓の新造さんが峠を通っていたら『早田の新さん！新さんや！ちよっこし話がああわ』と声が聞こえてきました。その声に振り返ると美しい女性が立っていました。美しい女性に案内されるまま小屋の前まで来ると中から歌声が聞こえてきました。『♪坂根よいとーこー一度はおいでーどっかいしょ♪』みると野壺に入って体を洗っているお侍さんがいるではありませんか。『わっ！クセっ！狐にだまされてるな！』すると今まで一緒にいた美しい女性の姿はどこかへ消えてしまっていました。びっくりして急いで帰る途中に、今度は絵描きの先生が『似顔絵はいかが？』と声をかけてきて描いた絵は狐の絵でどって飛び去りました。戸上と春日の狐は『人間様を化かすの面白いね』『化かすのって最高！人間様は正直だから、オホホホ』『おや、また一人やってきたよ』『あらっ泣きながら来るよ』『さっ化かしてやっか！』『そうしましょ、そうしましょ』仲の良い戸上と春日の狐は葉っぱを頭のうえに乗せると『お公家さん』に早代わり。今度は旅人の光次郎さん。大事なお金を盗られてすっかり元気がありません。『ああ、いっそ死んでしまおう』『旅のお方、いかがなされました』『なになに、金を盗られた？首でも吊って死んでしま

たいと!?』どうやらこのふたり狐、金を盗られた光次郎さんが首を吊りたい：と願い出たら、それに答えてやる様子。『首吊りねえ。この樹はどうでおじやる』『枝ぶりはようござる。縄もちゃんと持ってるでおじやる』『早よう。首吊りとやらを！』『じっくり、麻呂たちが見ておじやるぞ。はようはよう』このしつこい攻めに光次郎さんはびっくり！『うわー。とても首吊りの雰囲気じゃねえべ。やーめた』光次郎さんは一目散で峠を駆け下りました。『ははは、たまにはわしらもええことするがの』『そうね。コーン』

次の日、法事で帰る和尚さんの姿が春日のお山にありました。ふたり狐は公家に化け、若君がお亡くなりになって悲しみにくれている様子を見せ、肩を震わせながらしくしく泣いています。『これはまた、お公家さんお二人：事情はよくわかりました。とにかくお二人とも、丸坊主』になり亡き若君様の供養が大切』と聞いて聞かせ、和尚さんはふたりをくりくり坊主にしてしまいました。

坊主にされてしまった戸上と春日の狐はそれから後、すっかり心を入れ替えて、桜の花が満開のよい天気をめたく祝言をあげました。花婿と花嫁をのせた船が法勝寺川を上る頃、空は雲ひとつない「日本晴れ」なのに雨がしとしと降っていました。村人はこれを見て『あんれま、このええ天気になんか降ってきただ。こりゃあ狐の嫁入りじゃねえだか!?』『んだ。んだ！』と言



(絵：野口宣友)

ました。

結婚したふたり狐は、それはそれは仲良く暮らしていましたが、ある日法勝寺川が大雨で大洪水がありました。その時ふたり狐が流されて見えなくなった。水が引くと坂根水門辺りに穴ができていたのを狐が抱き合ったまま、穴をふさいで死んでいた。春日の里が水浸しにならないように「身を持って守った」のでした。ふたり狐は村人たちをからかい化かすうちに、和尚様から本当の愛とやさしさを教えられ短い一生を終えました。このふたり狐を祀った「お稲荷さん」が春日の堤地の上の小高い丘にボツンとその昔

おしまい